⑵　すけとうだらの動向

我が国周辺水域のすけとうだらは、北海道周辺及び東北沿岸に分布しており、生息域の分布等によって太平洋北部に分布する太平洋系群、日本海北部に分布する日本海北部系群、オホーツク海に分布するオホーツク海南部及び根室海峡に産卵場を有する根室海峡の４つの評価単位に分かれている。この中でもっとも資源の大きな太平洋系群は、2005年級群が卓越年級群となり良い加入となったものの、その後に続く良い加入は確認されておらず、2011年の資源量は82万トンであり、資源水準は中位、動向は横ばいと判断される。日本海北部系群については、2006年級群の良い加入があったものの、その後の加入が悪く、資源水準は依然として低位であり、動向は横ばいと判断される。オホーツク海南部は、資源水準は低位で動向は増加と判断される。根室海峡については資源水準は低位、動向は横ばいである。

⑶　まあじの動向

我が国周辺水域のまあじは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別されるが、当該資源の分布域は資源状態により大きく異なり、両系群は一部水域において混在して分布している。太平洋系群及び対馬暖流系群の2011年資源量はそれぞれ６万トン、54万トンで、水準はいずれも中位、動向はそれぞれ減少、横ばいと判断される。当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑷　まいわしの動向

我が国周辺水域のまいわしは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別される。当該資源は、これまで数十年単位で大きく変動してきており、その資源状況によって分布域が大きく変化することが知られている。両系群とも1988年から1989年を境として漁獲量が大幅に減少し、近年は低い水準で推移している。

当該資源の状況は、両系群ともに資源水準は低位であるが、太平洋系群の資源量が2010年46万トンから2011年63万トン、対馬暖流系群は、2010年3.4万トンから2011年5.8万トンと増加していることから動向は増加と判断される。しかし、親魚量は低い水準にあり、また当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑸　まさば及びごまさばの動向

我が国周辺水域のまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群に、また、ごまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と主に東シナ海に分布する東シナ海系群に大別され、それぞれ両系群は一部水域において混在して分布している。全般としてはごまさばは、まさばに比べ南方域に分布しているが、近年、太平洋では東北水域まで分布がみられている。

資源の状況は、まさばは、太平洋系群については資源水準は低位ながら2004年・2007年・2009年と豊度の高い加入があり資源量は2011年89万トンで、動向としては横ばいと判断される。対馬暖流系群の資源量は2011年88万トンで、資源水準は中位であり、動向は過去５年間（2006～2010年）の資源量が増加傾向にあることから、増加と判断される。ごまさばは、太平洋系群の資源量は2011年50万トンで資源水準は高位であり、動向は横ばいと判断される。東シナ海系群の資源量は2011年16万トンで資源水準は中位であり、動向は横ばいと判断される。まさば及びごまさばは、共に新規加入群の状況によって変動が大きいことから、資源動向について今後とも注視する必要がある。

⑹　するめいかの動向

我が国周辺水域のするめいかは、日本近海に広く分布し、季節により南北に大きく回遊するが、主に１～３月に東シナ海で発生する冬季発生系群と、10～12月に北陸沿岸域から東シナ海で発生する秋季発生系群とに大別される。

資源の状況は、資源量をみると、冬季発生系群は、2011年で90万トンと資源水準は中位、動向は減少と判断される。秋季発生系群は、近年中位～高位水準であり、2011年は135万トンとなり、水準は高位、動向は横ばいにあると判断される。

当該資源は、海洋環境によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑺　ずわいがにの動向

我が国周辺水域のずわいがには、日本海大陸棚の縁辺部、大和堆、銚子以北の太平洋岸及びオホーツク海の水深150～750メートルの範囲に分布し、生息域の分布によって、オホーツク海系群、太平洋北部系群、日本海系群及び北海道西部系群に分けられる。資源の状況をみると、この中でもっとも資源の大きな日本海系群は、富山県以西（Ａ海域）では1990年代後半から資源は回復傾向にあり、以前は低位であった資源水準が中位に回復した。2007年以降の資源量の推移より、資源動向は減少と判断される。新潟県以北（Ｂ海域）では、資源水準は昨年の中位から高位、動向は増加と判断される。また、オホーツク海系群の資源水準は低位で動向は横ばい、太平洋北部系群の資源水準は中位で横ばい、北海道西部系群の資源水準は中位で横ばいであると判断される。

２　第２種特定海洋生物資源ごとの動向

⑴　日本海西部海域のあかがれいの動向

日本海西部海域のあかがれいは、当該海域の水深150～900メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のあかがれいを主として漁獲する沖合底びき網漁業の漁獲量は、データが揃っている1991年以降の新潟県以西の漁獲量をみると、1995年頃まで増加を続け、その後は3,000トン台で安定していた。近年は卓越年級群の加入により動向としては横ばい傾向にあり、2010年の漁獲量は約5,500トンであった。しかし、沖合底びき網漁業のみで5,000トン以上漁獲していた1980年代前半と比べると、資源水準は依然中位であると判断される。

⑵　宗谷海峡海域のいかなごの動向

宗谷海峡海域のいかなごは、当該海域の水深40～80メートルに分布している。当該海域の近年のいかなご類の漁獲量は1995年の56,000トンをピークに減少傾向にある中で、2010年は前年を上回り、22,000トンに増加した。

資源状態の指標である沖合底びき網漁業の過去のＣＰＵＥ（１網あたりの漁獲量）の動向や近年の漁獲物体長組成などから資源水準は中位で、動向は横ばいと判断される。

⑶　太平洋北部海域のさめがれいの動向

太平洋北部海域のさめがれいは、当該海域の水深150～1,000メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のさめがれいを主として漁獲する東北海区の沖合底びき網漁業による漁獲量は、1978年の6,300トンをピークにその後年々減少し、1998年には108トンまで減少した。その後、やや増加し、2010年には228トンとなっている。

沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網あたりの漁獲量）の推移から資源水準は低位で、動向は横ばいと判断される。

⑷　瀬戸内海海域のさわらの動向

瀬戸内海海域のさわらは、冬を紀伊水道以南の太平洋沿岸及び伊予灘・豊後水道域で過ごし、春には紀伊水道及び豊後水道を経て内海へ来遊し、秋に外海へ移出する。

瀬戸内海におけるさわらの漁獲量は、1986年には6,378トンであったが、1998年には199トンにまで減少した。その後は徐々に増加し、2004年は1,465トンまで回復したが、2010年には1,444トンと若干減少した。資源量は、1998年を最低水準として2003年には3,645トンまで回復した。その後は緩やかに減少し、2007年は2,892トンとなったが、2010年は4,607トンと増加した。これらにより、資源水準は低位、動向は増加と判断される。